

## 内発型アグリビジネスの企業者機能とその形成過程に関する研究：伊豆沼農産の取り組みを事例として(平成16年度資源環境経済学講座修士論文要旨)

著者	田村 宣喜
雑誌名	農業経済研究報告
巻	36
ページ	74-74
発行年	2004-10-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/33455">http://hdl.handle.net/10097/33455</a>

内発型アグリビジネスの企業者機能とその形成過程に関する研究  
—伊豆沼農産の取り組みを事例として—

経営情報学分野 田村 宣喜

A Study on the Formation of Entrepreneur in Local Agribusiness —A Case of  
IZUNUMA NOUSAN Inc.— (Nobuki TAMURA)

【背景】

近年、若年農業就業者数の減少、農地資源等の荒廃、農業生産力の減退など農村の経済的停滞は加速的に進んでいる。グローバリゼーションの進展により、高コストの国内農業生産は国際競争力を失い低迷を続けている。農業生産の衰退は、これまでのような農村住民の協力関係が崩壊していく原因となり、その結果で多様な文化の伝承も困難になっている。

しかし、他方で自然環境や持続可能なシステムへの関心、自然と共生した農業・農村社会への共感など新たな動きも見られるようになってきた。こうした中、農村・農業の多様な資源を活かした農村発のビジネス展開に対する期待もまた高まっている。本論文では、そのようなビジネスを内発型アグリビジネスと定義し、研究対象とした。

【課題と手法】

内発型アグリビジネスを推進していく企業者機能やその形成過程に対して焦点を当てた研究は少ない。そこで本研究では、内発型アグリビジネスの企業者機能を解明し、イノベーションを展開していく主体の形成について検討することを課題とした。研究対象に選定したのは、宮城県迫町で内発型アグリビジネスを展開し、今日に至っている有限会社伊豆沼農産である。当社の社長である伊藤英雄氏に対する詳細なヒアリング調査に基づき本稿をとりまとめた。

【結論】

1. 企業者機能について

①具体的な目標を持つこと、②現時点でとれるリスクの大きさを考えながら、チャレンジを繰り返す中で、投資手法・経営手法を学習していくこと、③成功するコツを掴むために、小さな成功を積み重ねていくこと、④自分の足を使い、いろいろな人と会い情報を収集し発信すること、⑤自分の事業の核を育て磨き上げること、⑥農村地域内の社会関係に配慮し、地域資源の活用に対する理解を得ること、⑦謙虚さを忘れないようにすること。

2. 企業者機能の形成について

①ケーススタディを通して学習する組織の確立（MBA方式）、②各種組織・団体への自発的参加による人的ネットワーク形成、③企業組織に関わる全員が水平的な関係のもとで教え学ぶ機会や場の設置、④地域住民の積極的参加を促し、知識創造を行う新たな「場」の形成。

3. 「場」の重要性

伊豆沼農産は、地域という既存の「場」を利用しながら、直売会や赤豚会等を通し、広汎な情報ネットワークから仕入れた情報を地域の中に注ぎ込み、地域住民と一体になって発展していこうとしていた。さらに、地域住民からの協力も得ながら経営展開していた。このことから、内発型アグリビジネス企業者は地域において人々が集まる「場」を創造し、企業者自らと地域住民とがお互いに刺激しあう好循環を地域内に引き起こしていくことが、企業発展と地域発展の両立にとって欠かせないと思われた。